

不登校「親の苦悩」 トランプで“多様性”危機
新NISA 高配当「海運と鉄」

井上芳雄と帝国劇場
TM NETWORK

AERA

'25.3.3 No.11

アエラ 定価 600円

音楽ユニット

TM NETWORK

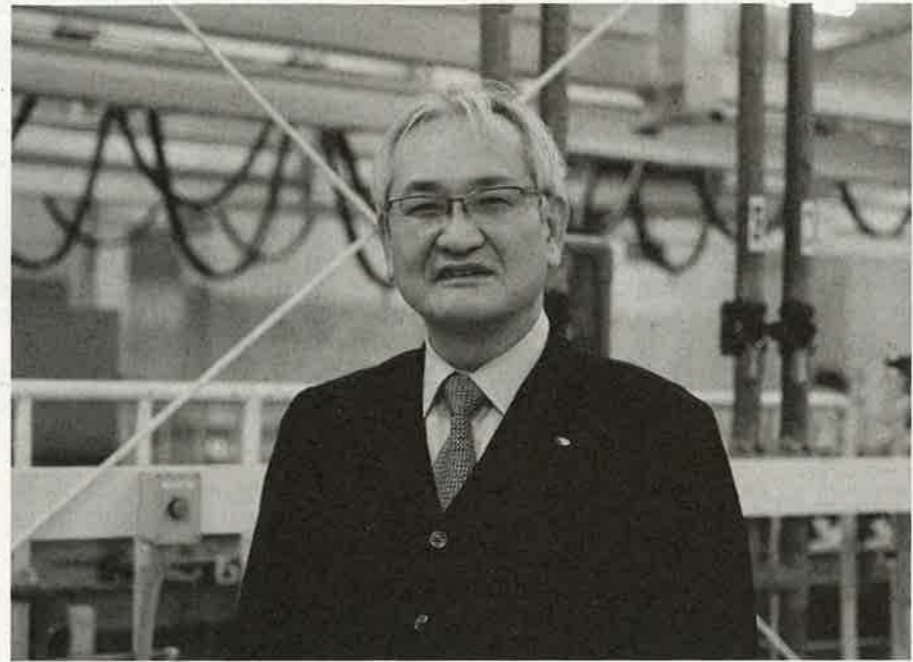


【巻頭特集】

不登校34万人の リアル

昭和55年6月10日創刊。雑誌「AERA」の発行元は、株式会社エーエーエー。創刊以来、毎月25日発売。通巻2077号。

清川メッキ工業 清川 肇 社長



「難題も断らない」と、父は言い続けてきた。電子部品のメッキも、後から技術開発した。自分もそう言ってきて、他社ができない地平もいくつも切り拓いた

仕事の後も大学院で装置開発 自分で考える社風に

1994年から95年にかけて福井市和田中の本社で夕方早く仕事を終えると、市内にある福井大学の大学院工学研究科へいき、メッキ装置の開発や実験を重ね、博士論文をまとめた。

メッキには、金属などに金や銀の薄い膜をかぶせる装飾用、空気中や水中の酸素によって錆びるのを防ぐ防食用のほか、薄膜に使う素材の電気伝導性など特性を活かす機能メッキもある。この機能メッキで独自技術を開発し、半導体などナノメートル（10億分の1メートル）単位の超微細な電子部品にもメッキして、清川メッキ工業を国内屈指のメッキ企業へ導いた。この博士課程の日々が、清川肇さんのビジネスパートナーとしての「源流」になった。

指導を受けたのは高島正之先生（現・客員教授）。工学部4年生で無機化学を教わり、大学院の修士課程でも世話になる。先生は電池分野が専門で、電池とメッキには使う化学反応などに共通点もあるが、「何をやるかは自分で考え、実験に必要な装置は自分でつくりなさい」と、自主・自力を求めた。

博士課程へ入る前、先生の研究室で清川メッキへきた不良品に関するクレームの原因を解析した。7割は客がメッキを依頼した素材の側に問題がみつかったが、3割はメッキ側に原因もあった。その回答と対策を早く出せば、客も納得する。遅いと工場までやってきて、メッキの過程を調べ、清川メッキ独自のノウハウまで教えるように求める。放置すれば、ノウハウが社外へ流出する懸念があった。

**博士課程へ誘われ
論文案を出す
赤ペンが入ってきた**

不良品の解析は、高価な分析機が必要だ。高島先生の研究室でそれが使え、あとは必要な装置をつくれればいい。学校の許可も得て解析に通っていたら、先生に「博士課程に入らないか」と誘われ、93年4月に入った。ただ、その後も1年近く不良品の原因を調べていたら、先生に「いつ研究するのだ」と叱られる。それで、冒頭のように2年目と3年目は研究を優先。朝8時から午後4時まで会社で仕事をし、それから大学へ行って、実験や研究を重ねた。

実験は楽しいが、論文を書くのは辛い。でも、先生はいつも夜10時まで残って、相談に乗ってくれた。論文案を「こういう内容にします」とみせると、赤ペンで添削して「明日までに書き直してこい」と言って帰る。

photo 狩野喜彦

午前2時ころまで書き直し、帰宅して寝て、翌朝に出社。そんな日々が1年半くらい続き、論文が通る。テーマは、もちろんメッキだ。この間、研究室は事実上、工作室だった。不良品の分析から、まだ世の中になかったメッキ装置をつくることへ重点が移り、研究室にある器具が使いやすくて助かった。メッキに関する新しい知識が蓄積され、「源流」が流れ始めていく。

87年3月に同大工学部を卒業するとき、清川メッキの創業者で社長の父・忠氏（現会長）が勧めた大阪府の電機メーカーへの就職を断り、大学院の修士課程へ進んだ。そのメーカーは創業家の子弟を受け入れ、後継者として修業する場を提供していた。そんな「レール」に当然のように乗るのが、嫌だった。「大学院の試験では何人か落ちる」と聞き、化学工学を猛勉強した。試験に通って、会社の経営を継ぐかどうかは別にしてメッキについて知っておこうと決め、社内で研究テーマを探す。博士課程で流れ出す「源流」の水源が、生まれていく。

修士課程を終えて89年4月に富士通へ就職し、川崎市の工場で半導体開発チームに配属された。当時の富士通は国内外で半導体工場を増強し、開発チーム



福井県を初めて出た就職

きよかわ・はじめ
1964年4月生まれ、福井市出身。子どものころは学校から帰ると、すぐに自宅向かいの神社の境内へいった。いけば遊び友だちが必ずいて野球ができた。境内が狭いので打球が外まで飛んで、隣家の窓ガラスを割ってしまい、叱られた。中学校は同じ学年に生徒が500人もいて、市内のいろいろなところで行き交うが、一度も話したことがないのですれ違うだけ。バスケットボール部の練習は走るばかりで、長距離に強くなって学校対抗マラソン大会や1500メートル走の選手に選ばれた。東京の大学へいきたかったがうまくいかず、旅行以外で県外へ出たのは富士通就職だけ。富士通では辞める1年くらい前から休日に、買ったカートで小型トラックに積んで、千葉県のカートサーキットへ行って走らせた。カーブで横にかかる重力には筋肉痛になるくらいの全身運動で、首も鍛えられた。中学校時代からの映画好きで、会社の寮からは川崎の映画館が近かったが、せつかくの首都圏住まいなので銀座で観た。

こういう研究開発は、何かに役に立つシーズ（種）を生む。そのシーズが、企業などが抱える課題が持つニーズ（解決策）

新妻と展示会へいき
新技術を披露して
営業活動はゼロ

2010年1月に社長になってから、ずっと技術部長を兼務している。先々、社長の座を譲っても、これだけは続けたい。誰もやっていないことをやるのは醍醐味で、「死ぬまでやりたい」と言い切るから、福井大学で流れ始めた「自分で考え、自分で装置をつくる」という「源流」からの流れは、まだまだ勢いを増しそうだ。

ジャーナリスト 街風隆雄
今回は清川肇さんの「源流 Again」で福井大学などを訪ねます

photo 本人提供 ※BS朝日とのコラボレーション企画です